碁も云らず、とらんぷも云らず、女ぐるひ芝居さわぎは、尤何のことやらん、云らざれば、さそふ水ありとも、なびく心なければ、人より頑はしきものよと、斥けらるとも、へちまともれもはねば、一向に心にかゝらず、たゞ〳〵心にかゝりてわすれがたきは、君の恩、親の恩、國家の恩、衆生の恩、聖人の道、三時の食、この外の俗談雜話、とばけものゝ噂、兒どもの戯れ事、聲色のさた、名利の爭ひごと、これらは、凡て幼き時より、教へられたることもなければ、覺えたることもなし、年も覺えたることなし、といはまくほしけれど、今は明に治まれる御代なれば、深山の奥にすめりとも曆日明なれば、いくつやらん云らぬやうの理もあらず、まして人間とうまれ來たるかひには、ともしたし、かくもしたしと思ふこと、樣々なれば、をゆびをりて、聊もわすれぬ、わすれぬことは、皆身の上の大事、忘れてよきことは、皆身のやくにたゝぬこと、かのまつりごち給ふ人の時めくも、劍はける人の我は顏なるも、世の人の幸不幸も、今は皆心にわすれぬれば、言ふこともわすれたり、

この文は、さる年、深草の元政上人かゝれたる草庵の記をみて、この体にならひ、その語をもいさゝかかりて、おのがおもひをのべしなり、剽竊の罪をおかしたるにはあらず、只たはむれにものしたる筆のすさみなりけり、こゝに一言をわりておく、

紅雨樓雜筆

蝶二愁郎

（其七）屋嶋（玉藻紀行の一節）

花の都さへ寂しき秋の暮、明石の月に名殘惜しき別れをつげ、一の谷の城址にむかし忍ぶの露ふみわけて、空に知られぬ雨しげく、我袖の朽ち果てぬまで打ちしをれしハ、やう〳〵二日ばかり前のことなりしに、けふは早くも一葦の水を隔てゝ、ねぼろに見えし讃岐の國、玉藻浦邊のかりの宿に、袂かた

しく身とはなりけり。

頃しも菊月のなかば過ぎ、十六夜の月は今東山の巓をはなれ、梅ノ花形の窓を透して、對ひの壁に婆娑たる竹の影を描き、皎々たる光は晝をも欺きて、やゝ高う昇るまゝにいよ〳〵冴けく、そゞろにきのふ見たりし明石のさまも思ひ出でられ、徒らに此良夜を寢てすごさんことの心惜しさに、飄然として立ち出でつ。ゆくても何處と定めなければ、たゞ足のむくがまに〳〵、東へ〳〵とたどりぬ。かの長安の大道ならねど、こゝも狹斜のちまたに近ければ、花にうかるゝ艶郎の足しげくして、あたら眺めを妨げらるゝことの腹だゝしく、ひたすらに道をいそぎて、やう〳〵街のはづれに出で、渡る一つの石橋は、げに塵の世の界なりけり。見渡せば一望豁然、野も山も月は隈なく照りわたりて、茅舍玉樓のへだてもなし。

市の巷の雜踏にひきかへて、これより先きは無人の境、紅燈も見ず絃歌も聞かず。日に映ずるものは、水の如き空に漂ふ一痕の月と、長く影をひくみすぼらしき我姿のみ 耳に入るものは、小川を流るゝ潺湲たる水の響、千草にすだく虫の聲、さては遠くなる涙のひゞき、忍んで我あとを蹤けるが如き草履の音のみ。見わかぬ月にうかれ〳〵て、露滴る道芝踏みにじりつゝ、或は歌ひ或は吟じ、神思愈よ爽快を覺え、われは最早浮世の人にあらず。歩むともなく何時しかに、一里に半あまる道程知らず〳〵に過ぎ、路は屋嶋山の麓に行きつまりぬ。見上ぐれば滿山寂として萬籟眠り、筧を落る水の音もかすかなり。顧みれば、我來た方は杳然として認むべからず。遙かに三四の火光點々せるを見るのみ。われは既に記憶の囊中にあるほどの詩歌をよみつくして、今やうやくに絞り得たりしは大江千里が歌なり。月見れば千々に物こそ悲しけれ……あゝ予は今迄の愉快こゝに失せて、忽ち悲哀の人となり

ぬ。半ば天上界に昇りかけたるわれは、再び浮世に舞ひ戻りぬ。

秋はもとより我身ひとつのものにあらず。我は月を見てさほどに悲しとも思はず。なか〳〵にわれを樂ましむるの種となればこそ、われを不知の間に此處までは浮かれ來らしめしなれ。さるを今我千里の歌によりて、忽ち悲哀を感ぜゑは如何、これ月の悲しきか、あらず、われを悲しましむる一物の、俄然我前に現はれたればなり。而して千里の歌はゆくりなくもその導線とはなれり。

あゝての屋嶋！、山はこれ平家の一門が死を決して籠りし處、浦はこれ赤白の旌旗入り亂れて、血煙たてし處なり。われはよく〳〵彼等と前世の約束ありと見ゆ。昨は一の谷の古城址に魂を銷し、今また此遺跡に腸を斷つ。熟ら平家の沒落を想へば、感慨胸に溢れて熱涙頰に滿る。月の雫に半ば霑ひし兩の袂、今は全く打ち玄めりて、絞ること二たび三度。

皎々たる滿月も遂に虧ぐる時あり。爛熳たる櫻花もいつしか散る時あり。一生は風前の雲、夢の間に散じ易く。三界は水上の泡、光りの前に消えなんとす。綺麗殿のうちには有爲の悲しみをつけ、翡翠の帳の中には有漏の願力ありとかや。憐れむ可し平家の一門、盛者必衰のためしにもれず、さしも古は臺階槐門に冊づきて、瓊臺瑤室の中に起臥ゑ、詩酒の花の下には、春の風を紫闥の袂に匂はし、仙宮の秋の月には、絲竹の御遊にのみ陪して、更に浮世の苦勞を知らざりし貴公子の、一度源氏に世をせばめられしより、住み馴れし花の都を跡にして、茫々たる西海の波上に漂ひ、伯り定めぬかぢ枕、漕舟の櫓聲は夢を破るの媒となり。水禽の羽音は魂を銷すたねとなる。嚴子陵が釣臺も脚を伸ぶるに水冷へ、鄭大尉が幽樓も薪を拾ふに山嶮し。赤旗遂に再び飜らず。空しく怨を呑むで壇の浦の藻屑となる。げに儚きはうき世のありさまなりけり。

されど盈虧は月の姿なり。開落は花の姿なり。あはれむべきもの豈たゞ平氏のみならんや。彼等が爲には俱に天を戴かざるの仇、鴨越の險を越えて馬蹄の塵に塗れ、屋嶋の波を冒して血汐まじりの水烟りに浴し、風にさらされ雨にうたれ、畢世の智と勇とをつくして、漸く彼等一門を長門の沖に殲滅せし源九郎も、鋭き讒竪の毒舌を抜ぐこと能はず。三年の勳功徒らとなりて、大物の颶風、吉野の深雪、安宅の關、衣川の水、ひたすら辛酸を嘗めつくして、あはれ平泉の露と消えしにあらずや。且つや、一たび覇權を握りて源氏の天下も、三代にして全く絶ゆ。平族の幽魂草葉の蔭より之を見て、すこしは亡執を晴らせしや否や。

嗚呼人生は眞に無常なり。盛といひ衰といひ、はた勝といひ敗といふも、おもへば皆一炊の夢のみ。一騎一鞭千兵を蹄にかけし大丈夫も、拔山蓋世萬國を掌に握りし名將も今何處ぞ。英雄皆枯骨となり、鈍戟悉く銷沈す。當年汗馬の地、桑滄尋ぬるになやむ。さはいへ、予期せずしてこゝに來る。これも何かの因緣ならん。此まゝに去らんも情なきに似たり。せめては古老の話に殘る夢の跡に、一掬の涙をゝがばやと、南麓に沿ふて小徑をたどり、古高松を過ぎて屋嶋の浦邊（俗稱壇の浦と稱す）に出づ。波靜かにして水面鏡の如く、サッと寄せては花と散る水烟り、怨に燃ゆる燐火に似たり。此處かして、昔の跡を訪ひ行けば、宗高が駒止の石、嗣信が墳塋、さては水田に殘る平族が總門の斷礎、北風つよく吹かば倒れんばかりに朽ちはてたり。梢頭既に葉をふるひて、骨露はなる森陰に、荒れにし一小祠を安置せる處、これぞ安德帝が行在所の御跡とかや。心のまゝに這ひまつはる葛蘿も、荒涼寂寞の風情を添ふるの媒となりて、見るから銷魂斷腸のわもひに堪へず。

悲しい哉、一天萬乘の君。龍樓鳳闕の內に成長らせ玉ひて、華軒香車の外に出でさせ玉はざるべき御

身の、刈菰の亂れにし世とはいひながら、御傷ましや。かゝる邊土にさすらひ玉ひて、藻鹽燒く海士の苫屋の夕烟り、妻こふ尾の上の鹿の曉の聲、或は渚に寄する浪の音、袖に宿かる月の影など、見聞き王ふにつけては、如何に御哀れを催し玉ひけん。推はかり奉つるも涙の種、眼拭へども〳〵玉をまろばし、落ちて碎くる此地の下には、怨を呑むで眠る武夫そも幾人ぞや。古塚雨に痩せて靑苔滑らかに、墓畔風に荒れて草莽稠し。仰ひで天に問へども、天寞々として當年を語らず。孤月一痕空しくかゝる。俯して地に訊ぬれども、地寂々として舊時を說かず。尾花幾基亂れてなびく。知らず冢上幾點の白露、これ昔を偲ぶの涙なるか。

愁然として佇立すること暫らく、四面やうやく朦朧として、次第に闇になり行くに、心付きて空うち見上ぐれば、月もわはれを感じてにや、曇りを帶びて悲しげに見ゆ。いつまで此處に立ちつくすとも詮なきわざなり。名殘はつきぬ此遺跡に、今は別れて歸りなん。と、もと來し途に取つて返せば、草村の虫已に鳴き止むで、唯折り〳〵寢鳥引き裂く梟の聲、物凄く聞ゆるのみ。夜はます〳〵闌けて空は愈よくもり、梢に動く風だにもなし。正にこれ百鬼夜行の時。

（其八）　水けむり

昨夏三陸の海嘯、悲慘これより甚しきはなし。予その時のわはれなる話ども、聞くがまに〳〵かきつけしが、こはやがて其ひとつなり。

わはれとも悲しとも、嘆きてかへらぬ水の泡、浮世は定めなきものぞと知れど、なか〳〵に、思ひあきらめられぬはきのふの變、見渡せば、森も邸も、泥土砂にうづもれて、わづかに見ゆる梢、山の端、住ふべき家居やいづこ。食ふべきものやなに。山なす屍は、臭さにはひの鼻を撲ちて堪へがたく。飢に泣く

男女のさけびは、天つちを裂くばかり、耳をついて忍びがたし。かゝる中にも、わけて哀れや三たりのはらから、姉は二八の春やさかり、弟は六つと三つばかりにやあらん、ねぼろにみだれし黒髪を結びもあへず、姉はつゞれの袖をしぼりて、血になく二人の弟をなだめすかしつ、涙ぐち際にたち出でゝ、よせてはかへす音すざまし く、嵐に砕くる潮の花を、見やる目もとに、溢るゝ露やなにならむ。あどけなき弟は、紅葉とや見む手をのばして、沖なる方をさし示しつゝ、喃姉上よ、父上は、なぜ、今までは歸られ玉はぬ。のう姉上よ、父こひし。とせがめば、季なる弟も、姉の袂にとりすがりて、のう母さまは〳〵、姉上、はやく呼び玉ひてよ。父よ、母よ、と二人の弟が、泣きじやくりつゝ絶え入るばかり、今は此世になき人の數に入りぬとも露知らで、したふにつけて、姉の悲しさやるかたなく、また今更に涙のせぐりきて、胸は熱湯をのむおもひ、やよ二人ともよく聞ねかし。れ身らがこふるれもちゝは、喃その父上と母さまは、きのふの水にひかれ玉ひて、わだつみの底の藻屑となりたまひぬ。いつまで此處に立ちつくすとも、すでに此世に亡き人の、歸り來たまふ期はあらじ。悲しとも戀しとも、おもへば此うらみ堪へがたや。神ならぬ身のつゆばかりも、かゝるまがつみのれてるべしとも知らで、奥山の權現さまに打ちつれて詣でしとき、夜道を危みひきとめられ、心ならずもそこに一夜を明かせしは、幸か不幸か、身は厄災を免かれたれど、御悼しやおも父は、なうなさけなや父母は、おもひもかけぬ厄災に、遠き冥途に旅路の空、今いづこにか迷ひ居たまふらむ。あはれ神も佛もなき世にか。よしや水にひかれて死ぬるとも、たら乳根の父うへ母さま一つにならば、なに惜しからむわれ等が命、なまじひに助かりし身のうたてしや。れもへば戀しきかな母うへ、慕はしきかな父うへ、なさけなき此水かな、哀れ知らぬこの水かな。れのれ水にく〳〵し。わが父もぜせ、わが母かへせ、父戀し、母なつかしや、と

聲をかぎりに姉弟みたりが、呼べど答もあら涙の、磯うつ音のすさましきのみ。

姉は心やさだめけむ。のう弟等よさな泣き玉ひそ。今さらに、海士のたく縄くりかへし、千たび百たび悔めばとて、かなしめばとて詮なき業なり。父には離れ、母にはわかれて、なに樂しみに世にながらへん。喃、ふたりとも心に落ちしか、飢にくるしきれもひをせんより、この水に身を沈め、戀しき父うへ、なづかしき母さまの、ねはする處にたづね行かむ。のう、弟らよいざ覺悟せよ、やよ喃。と姉は二人の弟を小脇にかゝへて、渚にたかき嵓の上より、涙間を目かけて飛び入れば、花と散り玉と碎くる水烟りを浮世のなごり、姿は消えて逆まく渦は三つ二つ。磯馴松ふく汐風たえて、梢になく鴉の聲かなし。なれぬ冥土の旅の空、あはれはらから、今何處にかさまよふらむ。

觀風遊記　其一

東籬園樵夫

筑山の北別に天地あり遙禮其前に當り碧水其後を爲す擬瀟湘の八景其間を點綴し風光到る處壯華ならざるはなし想ふ昔慶長の頃東照宮立て大將軍となり已に海内を截定して大に江戸城を築くや巧に諸侯を威服し親緣を封じ儒術を崇び利病を探り以て奸雄も其際に乘ずる能はざらしめしを爾來代を換ふること十五年を累ぬる三百餘藩兵馬の警を聞かざりし所以のもの要するに皆東照宮の諸侯を封ずる綜理綿密にして親疎新舊相箝制し容易に動く能はざらしめしによると雖ども又親藩たる者皇室の藩屏と爲り天朝を尊み幕府を重じ信を下臣隷に得しによらずんはあらず而して其親藩とは尾張紀伊水戸の三家をいふ余往年水戸に遊んで親しく其地勢風光を觀墟趾を弔ひ聊か筑山の北別に天地あ